# 魚津の教育

魚津市教育センターだより167号
令和4年3月 発行
魚津市教育センター
魚津市村木町1-21
〒937-0053 TEL(0765)23-9161

## 「語ることを大切にする教員に」

よつば小学校　校長　水橋　　渉

「あなたは、どんなことを語りますか。」

私は、基本的に月１回「よつば通信」という学校だよりを発行している。その中で大切にしていることは、内容がお知らせで終わるのでなく、「やりきるよつばっ子に育ってほしい」という願いから、「やりきる」大切さを訴えることである。「よつば通信」の発行はそのツールとして極めて大切な機会と考えている。今年の運動会が終わった後に発行した「よつば通信９月号」では、開会の挨拶とそれを意味付ける記事を書いた。

**【開会の挨拶の一部】**

今日の運動会は「やりきる運動会」にしましょう。やりきるとは、走りきること、やりきるとは、力を出しきること、やりきるとは、仲間と心を合わせきること。今日は１年生から６年生、５７４人のよつばっ子が主役です。自分の目当てをやりきりましょう。

**【挨拶の内容を意味付ける記事】**

私が運動会で子供たちに投げかけた開会の挨拶です。キーワードは「やりきる」。昨年の４月に本校に赴任して以来、１年半、機会を捉えて、やりきる自分になることの大切さを呼びかけてきました。やりきる経験によって努力する自分に気付きます。そんな自分によさを感じ、自分を大切にします。そんな子供は仲間も大切にします。揺るぎない自信も付きます。そして何よりも、今度もこうありたいと活動意欲が高まるとともに、より高い目標を設定します。やりきる経験の積み重ねが、自己の高まりとたくましい自分を創っていきます。仲間も同様なら、より高みを目指す集団となります。今年度もあと半年。「やりきる」よつばっ子となるよう、教職員一同、力を結集していきます。

よつば小学校に赴任して２年間。私は、卒業式や運動会等の学校行事、そして「よつば通信で「やりきる」を語りきった。

大量退職、大量採用が続き、市内の小中学校は若手教員が増えている。若手教員には、ぜひ機会を捉えて、自分の夢や思いを語ってほしいと願っている。語ることにより、それを耳にした魚津っ子の心に響き、魚津っ子がよい方向を目指し、魚津っ子全体のレベルが上がる。語る教員が増えることで、保護者や地域にも理解が深まり、本当の意味での地域・家庭・学校との連携が生まれる。

私は常日頃から、魚津の教員のレベルは非常に高いと語っている。子供の心に寄り添い、一人一人を大切にしている姿をよく見かける。私たち教員の一番の使命は、明日を担う魚津っ子をよりよく育て導くことである。魚津の教員には自分に自信をもち、魚津の教育の質をさらに向上させることを期待している。ぜひ、語ることをやりきってほしい。

## ■これからの皆さんに　～今年度退職される校長先生から

### 「想うこと」　　清流小学校　校長　大蔵　浩一

あとわずかで教職生活を終える頃になって、時間の経つ速さを感じながら、これまでを振り返ることが増えました。担任した子供たちや同僚の先生方との出会い、自分なりに頑張ったことや失敗したことなどが蘇ってきます。初任校は漁師町の中学校でした。当時は校内暴力やいじめ、不登校が社会問題となっていました。生徒指導に苦労しながらも生徒と共に部活動に力を注いだ時期であり、夜遅くまで先輩の先生と教材談義をしたり、生徒指導に対する考え方の違いから衝突したりしながらも、多忙感よりも充実感でいっぱいの若き教師時代だったと思います。

夜の海岸で数人の生徒と話していた時のことです。一人の生徒が「先生、何で勉強なんかせんなんが？」と聞いてきました。私は答えに困りながら「世の中に出て読み書き計算が出来ないと困るだろ。」「人と協力しながら生きていかなくちゃいけないだろう。その練習のためにも学校に行って勉強せんなんがよ。」と、答えにならないことを言ったように思います。当然、生徒から「意味分からんし！」「納得できん、もう読み書き計算はできる！」「俺は〇〇になるから学校へ行く必要はない！」等々、反撃されたことを覚えています。結局私は「勉強はいいから、友達と遊ぶために学校に来ればいい」と答えたように思います。私は教職に就きながら、勉強することや学校に来ることの意味を理解していなかったのです。恥ずかしいのですが、保健体育の楽しさを教えたいとの思いしかもたないで教職に就いていたのです。

さて、私の好きな人情物の笑いを含んだ映画「男はつらいよ」第40作品（寅次郎サラダ記念日）にこんな場面があります。甥っ子の満男が勉強に行き詰まり、寅さんに悩みをぶつけます。「ねえ伯父さん。なんで勉強なんかしなくちゃいけないのかな。将来何の役に立つのかな。」この問いかけに寅さんは実に端的に答えています。

「いいか。満男よく聴け。俺みたいな学のない奴はな、人生の大切な場面でどっちに行くか迷った時にサイコロを振って決めなきゃなんねえ。しかしよ、学問を修めた人は、そんな時、きちんと筋道立てて、はて？こういう時はどうしたらいいかなと考えることが出来るんだ。それが、勉強した人の素晴らしいところよ、なっ、そうだろう満男。」

私にはこの言葉が腑に落ちたのです。寅さんが言うように、物事を筋道立てて考えることの出来る将来に生きて働く確かな「考える力」を育てるために、学校での集団生活を通して様々な勉強をするのだと思いました。

今の若い先生は当時の私と比べて格段に高い能力をもっていますが、失敗を恐れずに自分の考えをぶつける点では、その機会が少ないように感じます。管理職はそのような環境をつくり、多くの経験の機会を与えることも忘れてはいけないと思います。

魚津市の先生方は日々の熱意と努力を重ねることで、大きな成果を挙げてきました。今後急速に先生方の世代交代が進んでいきますが、これまで受け継がれてきた魚津の教育の素晴らしさを失うことなく、若い世代に引き継いでいってほしいと思います。そして、魚津っ子たちに自信と誇りをもって、将来に生きて働く確かな人間力を育ててほしいと願っています。

※ちなみに「生きていく意味」についての寅さんの考えは、第39作品『男はつらいよ　寅次郎物語』の一場面に出てきます。

# 「教員生活を終えるにあたって －教師十戒－」

道下小学校　校長　谷山　博徳

昭和59年４月、吉島小学校から私の教員生活が始まりました。

学校勤務はすべて魚津市の小学校でした。また、機関等での勤務も多く、通算10年を数えます。特に終盤において６年連続で学校を離れた時期があり、「もう学校には戻れないなぁ」と思ったこともありました。しかし、学校勤務に戻ることができ、教員生活最後の２年間を道下小学校で終えられることを大変嬉しく思います。

ここに私の教員生活の１つの指針としていたものがあります。まだ若かりし頃、ある教育雑誌に載っていたものをコピーしたもので、紙の色も褪せ、所々、シミもあります。

長野県で戦中、戦後にかけて教師をしておられた毛涯章平という方が教師生活の記録としてまとめられた『肩車にのって』の冒頭に、教師生活を通じて自分の中に凝集してきた自戒の言葉の条々を、「教師十戒」として掲げられたものです。

一、子どもを、こばかにするな。教師は無意識のうちに子どもを目下のものと見てしまう。子どもは、一個の人格として対等である。

二、規則や権威で子どもを四方から塞いでしもうな。必ず一方を開けてやれ。さもないと、子どもの心が窒息し、枯渇する。

三、近くに来て自分を取り巻く子たちの、その輪の外にいる子に目を向けてやれ。

四、ほめることばも、しかることばも、真の「愛語」であれ。愛語は必ず子どもの心にしみる。　※「愛語」…相手の身を思いやって語ることば

五、暇をつくって子どもと遊んでやれ。そこに、本当の子どもが見えてくる。

六、成果を急ぐな。裏切られても、なお信じて待て。教育は根くらべである。

七、教師の力以上に子どもは伸びない。精進をおこたるな。

八、教師は「晴明」の心を失うな。ときには、ほっとする笑いと、安堵の気持ちを起こさせる心やりを忘れるな。不機嫌、無愛想は子どもの心を暗くする。
※「晴明」…自然で明るく、ゆったりすること

九、子どもに素直に謝れる教師であれ。過ちは、こちらにもある。

十、外傷は、アカチンで治る。教師の与えた心の傷は、どうやって治すつもりか。

今、時代や社会が変わり、学校を取り巻く環境も大きく変化しましたが、この「教師十戒」は、今でも教育の指針となりうるものだと思います。

自分が教師として何ができたのか、自信はありませんが、教師として諸先輩、同僚、後輩から、そして何より子供たちからたくさんのことを学ぶことができました。楽しかった数々の思い出が私の財産です。

## 「授業を楽しくすることです」　経田小学校　校長　村井　　武

初任の１学期、我流の授業と学級経営…。これは大変だと夏休みに教育書や教育雑誌をひたすら読みました。２学期、先輩方に学びつつ、これはと思った教育書の実践をいくつも真似しました。また、大学の同期３人で月１回集まって勉強会を始めました。それでもうまくいかないことが多く、やんちゃな子供たちに振り回されっぱなし。なぜうまくいかない？無謀にもこの困難な状況を教育書の著者に直接手紙を書いて相談しました。返事はないだろうなと思っていたところ、あっという間に葉書が届きました。その返事の最後の一文が「授業を楽しくすることです。」これが、私の教師生活を支え続けてくれる言葉となりました。

**理科「磁石のひみつ」1990年　吉島小学校３年３組**

飽きるまで磁石に触れる単元前半。いろいろな磁石に触って自分の発見や疑問をカードにどんどん書き溜めていきました。単元後半は、子供たちの発見についてみんなで考える授業。この日はTさんの発見「U字磁石の曲がったところは磁石になってない。」について考えました。それぞれの子供がいろいろ実験してみて自分の考えをどんどん発表していきます。＜磁石である‥11名＞＜磁石じゃない‥17名＞＜？‥２名＞と意見が割れました。そこで「この曲がったところで磁石を折ったらどうなる？」と発問。折れたところは鉄を引き付けるのか、子供たちは一生懸命考えて話し合いました。＜折れたところも引き付ける‥17名＞＜折れたところは引き付けない‥13名＞子供たちのきらきらの目が集まる中、トンカチで磁石を割り、その端っこをクリップに近付けました。（※磁石は割れる鋳物製を準備）

**社会「米騒動」1994年　大町小学校６年２組**

大町海岸で起きた米騒動の新聞記事（大正７年７月25日『富山日報』）を郷土資料の中に見付けました。（この日の前後の新聞にも米騒動の記事があるはずだ！）この疑問から教材研究開始。インターネットのない時代です。県立図書館でマイクロフィルムの存在を知り、北日本新聞社に行って『富山日報』『高岡新報』の当時の記事を見せてもらいました。地元の図書館に『朝日新聞』の過去の縮刷版があり、『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』の中に当時の記事を見付けました。魚津で起こった米騒動が富山県で広がり、そのことが全国紙で小さな記事として載ります。それをきっかけに騒動が全国へ飛び火し、数日のうちに新聞一面すべてが米騒動の記事で埋まる大事件となっていく過程が生き生きと伝わってきました。この謎解きのようなワクワク感を何とか子供たちに伝えたいと単元を構想し、「米騒動はなぜ広がったのか」６時間かけて追究しました。（※ICTを使えば２～３時間で授業可）

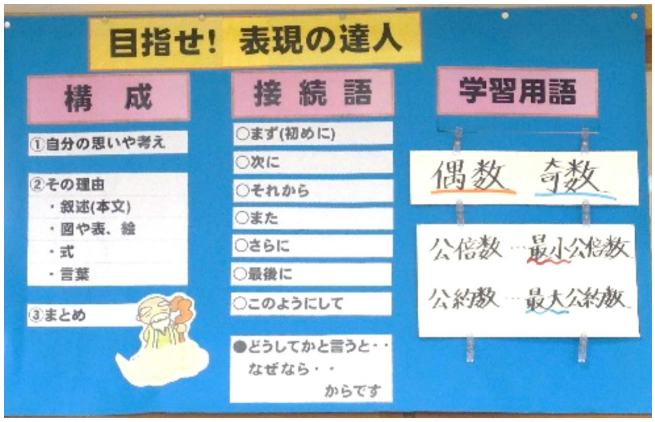
このころ私は年に１、２本、単元まるごとの実践の様子を学級だよりや授業通信で発信していました。それが私の教師修業でした。若い先生方にそのまま勧めることは難しいのかもしれませんが、ぜひ今できるやり方で、自分のテーマをもって実践、記録し、発信することにチャレンジしてほしいと思います。学級経営に行き詰まり、絶体絶命と思われるピンチがあるかもしれません。でも大丈夫、誰でも通る道です。授業を楽しくすることです。

## ■「拠点校の取組」

魚津市立道下小学校

本校は、自分の考えを筋道立てて書く力や根拠を明確にして分かりやすく話す力が不足しているため、話合い活動を中心とした児童同士の関わり合いの中で自分の考えを深めていくことが難しいという児童の実態がある。このような児童の実態を踏まえ、学力向上策として「自分の思いや考えを表現し、互いに関わり合う中で考えを深める児童の育成」を目指し、国語科や算数科の言語活動の充実を図ることを通して、実践を進めてきた。

### 〈表現力の育成〉




・　研究計画に「話す力、聞く力、書く力」の系統表を位置付け、発達段階に応じて低・中・高学年ごとに重点項目を選んだ。それを教室に掲示したり、振り返りカードで自己評価したりすることで、児童は身に付けたい力を意識しながら、目当てをもって学習に取り組むことができた。

・　ノート指導の充実を図るために、研修会を開き、ノート指導に関わる共通理解と教員の指導力向上を図った。ノートのまとめ方を定型化することで、児童は自分の考えの道筋を明確にしながら論理的に考えを進めるなど、見通しをもって学習に取り組むことができた。

・　具体的な表現の仕方が身に付くよう、教室の掲示物を工夫した。「声のものさし」や「ハンドサイン」の他に、話したり書いたりする時の構成や順序、分かりやすく説明するために必要な接続語、その単元で使いたい学習用語等を明示することで、言葉や式、図や表等を基に根拠を明確にして表現する力や、「まず」「次に」等の接続語を活用して分かりやすく説明する力が育った。

・　タブレット端末に自分の考えを書き入れ友達と共有したり、ノートに書いた自分の考えを電子黒板に映し出して説明資料としたりして、ＩＣＴ機器を表現活動に積極的に取り入れた。そうすることで、表現の幅が広がったり視覚的に分かりやすくなったりして、児童が意欲的に表現活動に取り組む姿につながった。

### 〈表現力を生かした話合い活動の充実〉

・　関わり合いを生む話合いの場を設定できるように、思考の流れに沿った学習問題の設定、考えを明確にもたせるためのノート指導、既習学習と関連付けて考えさせるための教室環境、考えの異同を明確にするための構造的な板書、考えを深めるための切り返しや発問の精選、考えの深まりを実感できるような評価の工夫について、校内の研究授業を中心に研修を進めた。このような実践を通して、「話したい」「聞きたい」という意欲が高まり、主体的な関わり合いの中で、考えを深めていく様子が見られた。

学力向上の取組を通して、自分の考えを表現することの楽しさや必要性を感じる児童が増えた。ノート指導を中心とした書く活動や聞き方・話し方のスキルを高めるための具体的な指導の充実が図られたこと、考えを表現する場を積極的に取り入れ話合い活動の充実を図ったことで、「話合いが楽しかった」「話し合ってよかった」という満足感や成就感を味わうことができたためと考える。今後は「話合いの場での表現力の向上」を目指し、他の教科や教育活動全般においても表現活動の機会を多く設け、表現力を高めるための具体的な策を講じていきたい。また、「児童同士が主体的に関わり合う場の充実」のために、校内研修の充実を図り、研究授業で得られた成果や課題を日々の授業実践に生かすことのできるような体制を整えていきたい。

## ■内地留学研修を終えて

**魚津市教育委員会派遣内地留学研修**

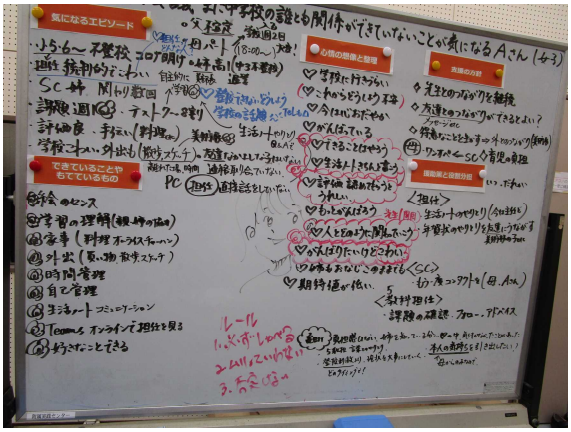
**■期間:令和3年10月1日～12月31日　場所:富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター**

### 「内地留学を終えて」　　西部中学校　保要　有里

内留初日に「これまで生徒に接した経験の中で一番心に引っかかっていることを紹介してみてください。」と、富山大学の石津先生に言われたところから研修が始まりました。自分が関わってきた生徒指導について、まず思い出されたのは、対応に「私たち教員が」苦戦した件です。教員目線ではなく、子供の視点に立って世界を見るよう、繰り返しアドバイスをいただきながら、何に引っかかっているのか、見ないように感じないようにしてきた部分も含めて記憶を掘り起こし、子供や保護者との関わりを見つめ直しました。自分に欠けていた視点を与えていただいたことが、この内留で一番得たことだったと思います。これまで全く勉強してこなかった心理学に触れ、こんな研究分野もあるのだと新鮮でした。理論をきちんと理解するところまでは到底行き着けませんでしたが、子供との関わりで困ったときに支えてもらえる足がかりがあると知ったことは大きな収穫でした。そして、久しぶりに生徒として様々な先生方から教えを受ける中で、普段すっかり忘れていたような気持ち、例えば「なぜ教員になったのだろう」「自分は何をやりたいのだろう」ということを考えさせられました。

１月から学校に戻り、まず愕然としたのは、自分がいかにまわりの先生方のお仕事を見ておらず、理解もしていないかということです。内留のまとめを「チーム援助を円滑に進めるには」という題名で作成したのですが、学校では教育相談担当の先生が「援助の進め方マニュアル」をきちんと配布されていました。私が見ていなかっただけなのです。ごく狭い身の回りの仕事だけにいっぱいいっぱいであることを、申し訳なく思いました。また改めて子供たちを目の前にし、子供の目線で世界を見ること、自分の価値観をいったん脇に置いて子供の声をよく聴くことが本当に難しいと感じます。複雑で多様な成育背景をもつ子供たちの将来を見据えて、どのような援助をしていくのか、先生方みなさんで考え、チームで当たっていかなくてはいけないと強く感じます。自分ができない多くのことを、周りの方たちに「助けて」と言えるよう、また言ってもらえるようになりたいと思います。

最後に、素晴らしい研修の機会を与えてくださった魚津市教育委員会、魚津市立西部中学校の先生方に心から感謝いたします。



## 魚津市教育委員会派遣内地留学研修

■期間:令和3年10月1日～12月31日　場所:富山大学人間発達科学部発達教育学科

### 「内地留学を終えて」　　よつば小学校　小山　倫太郎

令和３年度１０月から３か月間、富山大学への内地留学の機会を与えていただきました。富山大学人間発達科学部和田充紀先生のご指導の下、「子どもの実態に合った支援・指導のあり方とは～つまずきの背景と適切な支援・指導について考える～」というテーマで研修し、多くのことを学びました。昨年度初めて通級担当になったときから、常に自分の心の中に「果たして子供の実態に合った支援・指導ができているのだろうか」という思いがありました。また、「子供が学級に戻ったときに十分に生かされるような支援・指導ができていない」という思いも拭うことができませんでした。それが今回の研修により、実際の行動観察やチェックリストの活用等を通して、子供のつまずきの背景に目を向けることができるようになってきたと感じています。そして、「子供の困り感を軽減するためには、どのような支援や指導を行えばよいか」という視点で、文献を調べたり、実際に自分で教材を作ったりできるようになってきたという手応えも感じることができました。今回市内各校にお配りした資料は、一見同じに見える子供の様相でも、その背景は様々であり、その支援・指導は一つではないことを理解するための参考になるのではないかと思います。

他には、毎日２～３時間、主に発達障害に関する講義を受講し、ＡＳＤ・ＬＤ・ＡＤＨＤ等の基本的な特徴や、各障害に対する医療的なアプローチの仕方、保護者との信頼関係の築き方等を学びました。特に、様々な心理検査や適応尺度等のアセスメントツールについては初めて知るものも多く、科学的な視点から発達障害に向き合うことで、より子どもの実態に合った指導・支援を行うことができると感じました。

今後は、内地留学中にご指導いただいた大学の先生方、一緒に学んだ学生の方々から吸収した多くのことや、指導・支援の本質とじっくり向き合って感じたこと等を生かしていきたいと思います。そして、今までのように「相談する時間がない」「担任の先生は忙しそうだから声をかけづらい」など様々なことを言い訳にして十分な連携を図ってこなかったことを大いに反省し、通級担当として「担任と通級担当それぞれの支援・指導の効果がかけ算の関係になる連携」を指針として、日々精進に励んでいきたいと思います。

**学生の方々との合同ゼミで自立活動教材の体験活動**
**（体験活動後、その教材のよさや課題について検討）**

魚津市教育センターには、日頃の教育指導のヒントになる資料、教材、視聴覚機器があります。ぜひご活用ください。　HP（http://www.uozu-c.tym.ed.jp）

## ■魚津市教育センターからのお知らせ

### 情報教育　「ICT機器」の活用

今年度から本格的になった文部科学省が進める「GIGAスクール構想」によって、市内各小・中学校には、児童・生徒一人一台端末を日常的に使う、学習環境が用意されている。この効果を発揮するために、いつでも、どこでもICTを使って学べる学習環境を整えることが求められている。

市内小中学校に導入されている「Teams」を活用し、「どのようなことができるのか」、「どのように使えば、日常的に活用できるか」や「どのような問題がおこりえるか」など考えていきたい。

まず「日常的に活用できること」として「生徒との面談、連絡帳代わり、短学活の連絡、教科連絡、課題の配信・提出、朝の健康観察・検温チェック、小テスト、成績処理、授業の感想の記入・共有、アンケートの収集・回答・記録、授業ノートのチェック、意見交換」などが挙げられる。

次に、考えられるリスクとして、「自由に書き込めるチャット機能を使ったいじめ（R2.11町田小6いじめ自殺など）」「情報共有するもの以外への誤送信（R3.11広島小中一貫校いじめアンケート生徒閲覧可のページに誤送信）など」「写真・動画の撮影」、「ネットのアクセス、時間」が挙げられる。

そこで、各学校では、教員個々のICT機器の活用の仕方、指導力に差があることを踏まえ、校内研修を行い、ICT機器、「Teams」の活用に抵抗がある教員を含めて、全校で使えるようにする必要があるだろう。また、「いつでも」活用するためには、提供する教員側の準備の問題もあるが、個々の家庭のWi-Fi環境の整備の問題も解決していく必要があるだろう。

リスク回避のためには、小学校(低・中・高学年）中学校別の「情報モラル指導カリキュラム（身に付けさせたい資質・能力）一覧表（市情報教育研究会 作成)」を各学校の年間指導計画作成の縁にしてほしい。

ＩＣＴの活用は、学校の取組次第で一気に進むように思う。コロナ禍を奇貨として学校と家庭が連携して取組を推進してほしい。

### 生徒指導の本　学級･学年の〝荒れ〟を防ぐ叱り方
### 「叱り方」の教科書

生徒指導コンサルタント 吉田　順 著　　学事出版 発行

「叱って育てる」か「褒めて育てる」か。

中日、阪神、楽天を優勝に導いた、星野仙一監督は、バントを失敗した選手を人前で叱りつけた。反対に、近鉄、オリックスを優勝に導いた仰木彬監督は、バントを成功した選手に「ナイスプレー」と声をかけ、褒めた。この問いには、正解がないのだろうか。

本書は、学校で「叱る」ことの6つの教育的な意義と日常的なよくある４２の場面を取り上げて「叱り方」の説明をしている。

最近の風潮や学校の言い伝えに「みんなの前で叱ってはいけない」「しつこく叱らない方がよい」「その子に合わせた叱り方をする」「叱るのは冷静でよいが、怒るのは感情的だからだめ」というものがある。

それに対して筆者は、本書で明快に答えている。「みんなの前で叱るのは、価値観を教える絶好の機会」「何のために叱るかであってどう叱るかではない」「葛藤を起こすことが目的」なので、時には「しつこくせまることがなくてはならない」し、時には「その子に合わない叱り方をする」必要がある。とにかく「厳しく叱ることをあきらめてはいけません」と。

筆者は昨年に引き続き、8月の「生徒指導に関する講演会」（魚津地区教育センター協議会主催）の講師でもあるので、著書を読んで、実践したうえで臨めば、実りの多い研修になるだろう。

### 学級経営の本　温かい人間関係を築き上げる
### 「コミュニケーション科」の授業

教育実践家 菊池　省三・菊池道場 著　　中村堂 発行

「話合いが楽しい」「みんなと学ぶことが楽しい」「自分にもよいところがある」「みんなの意見を聞きたい」など、コミュニケーション力が、高まれば〝荒れ〟はしないだろう。筆者や全国の菊池道場が実践した「温かい人間関係を築き上げる力を育て合う教科」＝「コミュニケーション科」の指導内容と具体的な指導例が書かれた本。前項で紹介した吉田順氏の理論と併せて二頭立てで実践すれば、学級を、そして授業を「楽しくする」ことができるだろう。